

子ども、保育、保育者養成の現状と課題

——本学幼児教育科卒業生の実態調査の結果から——

松村 尚子

一九六六(昭和四二)年に開設された本学幼児教育科は、まもなく二〇回目の卒業生を送り出すこととなる。この二〇年間にわたる本科の歩みについては、その時々に見直しが行われてきたし、またさまざまな角度からさらなる検討がなされうるのであるが、ここではその作業の一端として、先に我々が実施した幼児教育科卒業生の実態調査結果の概要を報告することにする。

本調査は、一九八四年一月に調査票を郵送し、同年一二月末現在における回答を依頼した。調査対象は、本学同窓会名簿をもとにして、一九八四年三月卒業までの、第一期から第一七期の卒業生全員とした。質問項目は、フェイス・シート部分を含めて合計三三である。質問内容は、(1)幼児教育科および本学の在学中の教育体制と学生生活に関すること、(2)卒業後の職業経歴と現在の職業に関する意識について、(3)大学・科・後輩に対する要望や期待、(4)現在

表1 回答者の内訳

期	卒業年 (昭和)	回答数	卒業者数
1	43	14	44
2	44	15	54
3	45	20	63
4	46	20	59
5	47	14	55
6	48	13	49
7	49	14	52
8	50	14	46
9	51	15	77
10	52	15	72
11	53	32	83
12	54	35	78
13	55	38	83
14	56	41	91
15	57	32	66
16	58	32	84
17	59	28	86
計		392	1,142

の子どもと保育の現状に対する見解について、を
 主要な柱とする構成であった。

第一期から第一七期までの卒業生総数は一、一
 四二人であるが、調査票発送の時点における住所
 不詳者、および宛名人転居先不明により返送され
 てきたものの合計九〇、したがって実送付数は一、
 〇五二、このうち有効回答数は三九二、同回答率
 は三七・三％であった。

表1は卒業年次別の回答状況を表わす。この回
 答(収)率の数値が示すとおり、本調査結果は、全卒業生中の三分の一という一部分のみの実態を伝えるものに過ぎ
 ない。このような低回収率の要因として、まず第一には、対象者のほゞ全員が女性であつて、結婚や家族の転宅等に
 伴う居住地変更の頻度が高いこと、また、調査票がかつての帰省先、生家に送付されたまゝ、滞り、婚家や就職先に在
 る本人の手許に届かない場合の多いこと、が考えられる。さらには、対象者が二〇代〜三〇代後半の、職業はかりで
 なく多くは家事や育児に多忙な年齢層にあること、そのうえ、調査票の送付が年末の忙しい時期と重なつたことの影
 響のあることも、回答の文面から読みとれる。

分析にあたっては、仏教保育を理念として存立する本科ないし本学固有の教育体制にかかわる課題を明らかにする
 ことと、本学のみの問題にとどまらず、保育者という専門職の養成課程を了えた女性の職業生活の軌跡に注目するこ

とを通して、現在の専門的女子労働一般にも通底する問題を追究すること、この二側面を念頭においた。

二

全国に数ある大学・学科のうちで、本学の幼児教育科において送った二年間の学生生活は、卒業後のいま、どのよう位置づけられているであろうか。

学生生活をふり返って最も有意義だったと思われることは、(1)幼児教育科での実習や見学(回答数二〇七人、以下同じ)、(2)学内の友人との交友関係(一九一人)、(3)クラブ・サークル活動(九〇人)、(4)正課の授業(八八人)の順である。ここでは、実習や授業は後の生活に有用だったとの意味あいであるが、それとは異った視点で、学生生活における学業以外の人との出会い、人間関係のもつ比重の大きさがうかがわれる。そのことは、回答者中六〇%近くが、クラブ・サークル活動に、他学部を含めた多くの友人との交流や深い人間的なふれ合いを求めて(八三人)、また、さまざまな体験や知識を得て学生生活を充実させることを希って(六六人)、参加する一方、自宅からの通学所要時間が長い(七五人)ために、あるいはピアノの練習をはじめ授業の準備や課題に追われて(六五人)、時間的・精神的な余裕がなく、参加する機会をもたなかった残り四〇%強の中に、それが大きな心残りであると記す人の多いことから類推される。

本学への入学の主な理由は、(1)就職など将来のことを考えて(一一五五人)、(2)学費が高くない(一四八人)、(3)学力が適当(二二八人)、(4)本学の特色、学風、雰囲気にかかれて(二一九人)、(5)家族、教師、先輩の勧め(一〇二人)の順であった。この理由は多分に現実主義的傾向が強いといえるが、本学幼児教育科が仏教保育の理念に立つことに

表2 仏教系科目についての感想

1. 感銘深く、人生観・保育観のうえで影響をうけた。	77
2. 真宗・仏教保育を自分のものとして考える契機となった。	120
3. 授業の雰囲気がよくなかった。	32
4. わかりにくく退屈であり意義が感じられなかった。	74
5. そんな科目は必要ないと思った。	5
6. その他（具体的に記述）	62
N. A.	33

ついては、九割近くが、入学前から（二二四人）、または入学直後の早い時期から（二七人）認識している。しかしながら、在学中、大学主催の宗教行事に対しては、よく参加した（二四人）、時々参加した（六八人）の参加組は、ほとんど参加せず（一五三人）、全く参加せず（一三九人）の不参加組の三分の一に満たない。そのような不参加の理由も、学業やクラブ活動等の自分の生活に忙しくて（一三六人）、宗教行事にまで関心が向かなかった（一四八人）ことによる。それゆえに、学生時代に最も不十分さと改善の必要性を感じていたこととして、教育面においては、(1)カリキュラムのうえでゆとり（一八二人）、(2)楽器や個人レッスン室などいつでも自由に使用できるような教育研究のための体制、設備（九一人）が指摘されるのである。行事の意義を考えたり、自ら選択する暇もあらず、遠距離通学生は始発電車に登校してもレッスン室は既に満員で確保できない苦勞を背負つての指摘であろう。ちなみに福利厚生面におけるそれは、(1)食堂、売店、サークルボックス等の施設、設備（二五一人）、(2)Uターン等の就職対策（六七人）が抜きん出て多い。

宗教行事にはそれほど積極的でなかったとして、正課の授業に設けられた仏教関係科目についてはどうか。幼児教育科で受講された科目は、年度による異同はあるが、仏教学、真宗学の入門、概説、そして仏教保育である。それらについての感想、印象を、表2に示したようなアンケート部分および自由記述の回答から、大きくまとめると次のとおりである。

一つは、授業が「真宗、仏教の考え方を自分の問題として考える契機となった」というもの、二つに「内容はおもしろそう」だが、「授業の雰囲気がよくなかった」り、「わかりにくくて退屈だった」、あるいは「抽象的、一般的で自分自身や保育とのかかわりなどが理解できなかった」ために、あまり印象に残っていないというもので、両者がそれぞれ三分の一ずつを占める。次いで、「感銘深くきき、人生観、保育観に影響をうけた」がほゞ五分の一である。ここでは、実技的な専門科目でない講義一般に通ずることであるが、テキストの選択を含めて授業担当者の人格や持ち味といった要因が、学生の受講姿勢や興味、関心のもち方、内面的な深まりを大きく左右するようである。が、当時は消極的な受講であったとしても、時が経つにつれ、人生経験を重ねるにつれて関心の強まる傾向がみられ、少くとも、学生時代のこれらの授業がその関心の一契機となっていることは確かだと思われる。それは、現在の時点で、仏教保育の精神を「非常に大切なことと思う」が過半数に上り、仏教といわずとも「なんらかの宗教心が保育にあたって大切だと思う」との多くの回答があることによっても裏づけられるといえよう。

ところで、幼児教育科の授業のうち、卒業後の生活に特に影響を及ぼした科目としては、群を抜いて音楽、とりわけピアノがあげられている。就職してすぐに役立つ即戦力として、あるいは応用力としての力量形成の点で、授業自体がどうであったかの評価には賛否両論がみられるが、在学中にも卒業後にも、音楽（ピアノ）の技倆はすこぶる問題含みであるらしい。おそらくそれは、一面では現代の保育界のありようとも強く関連してのことであろうと思われる。

次に、自身の在学中をふり返って、またその後の職場や家庭における体験にもとづいて、大学、後輩に対してさまざまな期待や要望が寄せられている。後輩へのそれは、一言でいえば、何ごとにも積極的に臨み多くを吸収して欲しい。

いということに尽きるのであるが、そのために、一つには授業を中心として専門的な知識、技量を磨くこと、二つには、他においては得られない本学の特徴である仏教の教えを学び研鑽を深めること、三つに、クラブ、サークルなどで幅広い体験を積むこと、そして他の人にならない自分だけの個性、特長を身につけて幼児保育の場に進んで欲しいということになる。在学中に、幼稚園教諭免許の取得のみに安んじて保母資格取得に無欲であった自らの見通しのなさを悔いる声も多い。また他方、大学に対しては、より深く学びたい者のために四年制のコースを設けるか編入の方途を拡大すること、幼児と日常的に接しうる場として付属幼稚園を開設すること、仏教関係の講義、一般教養科目を増設すること、などが提言されている。そのなかで、とりわけ目立って多いのが幼児教育科の同窓会に関連する要望である。それには、単に科独自の同窓会を求めるものから、幼児教育科および大学の現在の動向、卒業生の近況や便り、また幼児教育に関する講演会や研究会の紹介などの収録された同窓会専門誌が欲しい、あるいは卒業研究誌の購入の希望、さらに、卒業生の幼児教育専門科目の聴講を認める制度の採用、また主に夏期休暇中の幼児教育関係講演会や研修会の開催を求めるものなど、科としての組織化やとり組みばかりでなく、大学全体にかかわる要望も数多く表明されている。

ところで、幼児教育科に学んでの全般的な感想として、どの卒業年次生からも共通に指摘されることを要約すれば、結局のところ、少人数制に伴う利点に帰着するといつてよい。その一は、教員と学生との関係である。教員スタッフの「教授上の指導が熱心で個々人にまでゆき届いていた」こと、教員・学生間が親密で、「学業以外の生活面の相談もできる家庭的な雰囲気があった」こと。第二は学生相互の関係である。クラスのみならず「学友と心の通う交流がもてた」こと。その親交は現在も、一年に幾度か会う（二六五人）、手紙をかわす（一九四人）、電話し合う（一

表3 現在の職業 (人)

	既婚	独身	計
幼稚園教諭	公立	3	18
	私立	38	44
保育所保母	公立	23	57
	私立	39	54
施設保母	公立	3	4
	私立	1	1
会社員	4	21	25
公務員	4	11	15
自営業	4	0	4
無職	135	8	143
学生	0	2	2
その他 音楽講師、 産休補助 etc.	13	10	23
N. A.	1	1	2
計	232	160	392

三

四七人)等の形で続いている。第三に、クラス規模が適当で、「静かに落ちついて授業が受けられた」ことがあげられる。艱難、不満が多々あったとしても、右のような思い出は自らの学生生活の彩りとして意識されており、それが前述のような要望を生む所以でもあらうと思われる。

本学における二年間の専門教育の課程を了えた卒業生は、どのような歩みを辿っているであろうか。回答者の現在の職業分布は表3のとおりである。予想どおりに、保育所保母、幼稚園教諭、そして会社員の順に多いが、「その他」の項には、無認可保育所保母、パートタイムや産休補助アルバイトの保母、ピアノ、エレクトーン等の音楽教室、幼児教室の講師が含まれる。したがって、全体の五〇%近くが幼児教育・保育関係の仕事に従事しているとみられる。また、「無職」の項目に類別された「主婦」には、一般的な都市家族の専業主婦のイメージとは隔りのある寺院主婦―「坊守」、 「同見習」と自ら併記した―を相当数含んでおり、実質的な就労率は、二〇〜三七歳というこの年齢層としてはかなり高いといえるで

表4 卒業後の就職先 (人)

幼稚園教諭	150
保育所保育	155
施設保育	10
公務員	17
企業	40
個人営業商店 etc.	2
その他 (音楽教室、 団体、病院 etc.)	9
N. A. 不明	9
計	392

あろう。ちなみに、既婚者二一九人中、婚家が大谷派(四四人)および他派(一人)寺院である者は合わせて六二人、二七%である。全回答者中の寺院出身者九五五人、二四%の比率よりや、高い。

卒業直後にはごく少数(二・三%)を除きほとんどがなんらかの仕事に従事しているが、そのフルタイム就業者の就業先を示したものが表4である。前掲の表3の数値と並べてみると、職業生活における幾つかの傾向を読みとることができそうである。無論、同一人が、公立の幼稚園と保育所の間で職場を移動する、現場の保育職から事務職に移る、全く異種の職業に転ずる、あるいはまた就職―退職―再就職のコースを歩む、などのさまざまな移動がありうるので、数字のうえでのストレートな対比には多くの留保が必要である。が、両表から、一般的にいつて、幼稚園教諭よりは保育所保育および公務員の方の残留率が高いことは少くともいえるであろう。そこで、個々人の勤続年数についてや、詳細に追うと、次のとおりである。

調査時点で十年以上勤続のフルタイム就業者は、一期〜八期生まで合わせて三七人であるが、その七六%にあたる二八人が公立の保育所、幼稚園勤務であり、他は自営の保育所、幼稚園、私立の大学、保育所、音楽教室の勤務者である。ついながら、このなかには、公立保育所々長(三期生、五期生)や、自営の保育所の運営・指導にあたりながら当該地域・県の保母会の要職を兼ねる例(一期生)などが含まれている。このほかにも、途中、育児のために退職、一〜三年後に復職して現在保育職を継続している例(二期生、四期生)や、九年、十年と勤続しながら家庭の事情(第二、三子の出生、子の病氣看護等)で退職して現在は無職というのが合計八例(三期〜六期生)あるが、それ

らの人々はすべて勤務先が公立の園である。次に、卒業後未だ十年に満たない第九期以降の卒業生の勤続状況をみると、結婚・出産後も勤続しているのは、九期生に三人、十期生に六人、一二期生に五人、二期生に七人という具合に続くが、合計二人中の一七人、八一%までが、ここでも公立園の勤務となっている。一三期以降の二〇代半ばまでの世代にあっても、ほぼ同じ傾向が推測される。たゞ、既に出産期に入った一三期生あたりには、私立園の勤務でも出産後も勤続する例が現われ始めている。育児休業法の定着を反映するものであろうか。

以上みてきたように、保育者という職業の継続には、勤務先が公立の園であることが大きなプラス要因の一つであるといえるであろう。そのことはまた、職場移動のパターンとも関連する。広い意味での「転職の経験がある」と答えたのは五八人であるが、転職前後の職種が判明する四七人についてみると、ほぼ次の三つのパターンに分けられる。(1)は結婚またはその準備のため、あるいは帰郷のために、主として私立園を退職し、臨時的・補助的な仕事に就く型。(2)は、私立園を短期間のうちに退職し、試験に合格して公立園に移る型。そして(3)は、私立園を結婚のために退職し、後に婚家自営の園を手伝う型。このうち(1)はまもなく結婚か出産を機に職場を去って家庭に入るが、(2)(3)は職場に定着して長期勤続の道をたどることが多い。(2)はもともと大半が仕事を続けるために身分の安定・保障を求めての移動であるし、(3)は三世代以上同居で自営業的就業形態に近いゆえに、仕事を続けることが容易であるからであろう。

ところで、フルタイムの就職先を「結婚またはその準備のため」に退職した人(一〇七人)は退職者全体の六〇%強であるが、そのうちの七〇%強が勤続期間二年〜四年に集中している。これは、「出産、育児のため」の退職者(二人三人)の勤続期間が二年〜十年に広く分布するのと対照的である。一方、回答者の中の既婚者二二〇人の初婚年齢を

みると、二三〜二五歳に全体の六〇%強が集中する。また、独身者および配偶者と離・死別した人を除いて、既婚者の家族構成、家族形態についてみると、本人夫妻と子から成る核家族（一三六）が六〇%、本人または夫の親夫妻とも同居する三世代家族（九二）が四〇%の割合である。さらに夫の職業では、(1)会社員（八六人）(2)公務員（四一人）(3)僧侶（二八人、但し専業のみ。現在の主たる職業は僧侶ではないが、いずれは僧職を継ぐと考えられるものがある）(4)教員および学校職員（二七人）(5)自営業（二〇人）の順に多く、この五種で八九%を占める。あとは少数ずつ団体職員、自由業、幼稚園・保育所経営などが続く。ここで、初職の勤続年数、初婚年齢、配偶者の職業、家族形態等についての右の数値を関連づけてみると、大まかに次のような就業の構図が浮び上がる。(a)最も多いのは、卒業後就職して三年前後を経た二三〜二四歳の時点で結婚やその準備のために仕事を辞め、二三〜二五歳には結婚して核家族・雇用者世帯の主婦として家事・育児に専念するタイプである。ピアノを教えるなど短時間の就業はあってもごく副次的である。割合としては半数程度と考えられる。(b)次に、結婚、出産後も自営業者や僧侶である配偶者の妻として家業を手伝う生活を送るもの。ほゞ二〇〜三〇%程度であろう。(c)保母、教諭を含めたいいは公務員として、結婚、出産の間も勤続するもの。一五〜二〇%程度であろうか。(d)、(c)と類似のコースを歩むなかで、同居の母親の死や第二子、第三子の出産、子の病氣療養などの事態によりやむなく退職し主婦専業となるもの。五〜一〇%程度。◎最後に六〜七%ほどは、独身のまゝで職業を続けるタイプ、である。そして、現在無職である人のうち、六〇%強が「できれば」あるいは「是非とも」再就業したいという希望をもつが、その多くは(a)の主婦である。たゞ、子どもの成長段階によってその時期が異なるうえに、幼児教育・保育関係の仕事を望むのは二五%にすぎず、再就職の現実のきびしい状況を見こしてであろうが、その志望はそれほど強いとは思われない。

以上、卒業後の職業経歴を中心にみてきた。あえて職業の継続という点に注目するならば、ここでも他の女性の専門的職業の場合と同じく、結婚・出産という節目に大きく左右されること、だがそれをのりこえて一〇年、一五年以上も勤続し、斯界の中堅となり、あるいは既に管理的・指導的地位に到る例が現れていること、しかしそれにはたとえば公立であるというような職場の条件が限定されること、などの点が指摘される。そして、二度、三度と転勤や受験をも重ねながら「一生の仕事」として長年月働き続けている人々の回答文面からは、生き生きと活躍する人の自信と熱い息吹きと、また本学での学生時代のさまざまな体験が深奥においてその支えになっていることが感じられるのである。

四

最後に、現在の子どもと保育の現状についてはどのようにとらえられているであろうか。

「あなたは現在の子どもたちの生活、保育の現状についてどんな思いをおもちですか。ご自由におきかせください」との問いには、文字どおり自由に、それぞれの生活を反映したさまざまな思いが綴られている。当然のことながら、一般的に、年齢が上がるほど自身の育児や職業上の体験をふまえて記述量が増え、視点の広がりが見られる。卒業後数年間は、保育現場の近況報告的なもの、保育の難しさに関するものに偏りがちであるが、次第に家庭、地域、学校教育、行政との関連、労働条件、社会全般の動きなどで、視野に収められてゆく様子^がうかがわれる。そのなかから、次に、立場と年齢の異なる実例を数篇、原文のまゝ、あげてみよう。

共働きの家庭が多くなり、また親が自分自身の生活や人生を大切にするようになり、そのしわよせが子どもの生活に来て
いるように思います。保育所の役割も大変重要な位置に置かれているように思います。……（二期生、私立保育所保母）

自分の生徒たちをみていて、四、五才については、まわりに物が揃っている割に、美しいもの、かわいそうなことにたい
する感動や、お母さんとのふれあいに欠けている。言葉やT.V.のことなどは早くおぼえても感性がついていないと思う。
親の方も働いている人が多く、親自身に心のゆとりや豊かな感受性がないような気がする。おけいこことをすれば子どもが
自然に賢く育つと思っているようだが、親の姿勢はすぐ子どもにうつる。三才児では、今の子どもが母親とのスキンシップ
や心のつながりが少なくなっていることがわかる。集団を初めて経験する三才の子ども、わがま、のし放題の子どもたちが、
先生の話の聞いたり、友達のことを思いやる気持をもつまで半年かかった……が、今の子どもに何が必要なのか、最近少し
ずつわかってきた気がする。……（一期生、音楽教室講師）

子ども数が減り、どこの園でも一人でも多く来てもらおうと必死になっている。そんな中、親のニードに答えようと、
バス送迎、給食、長時間保育は勿論のこと、漢字教育や算数なども保育内容に組み入れる園も出てきた。親が少しでも手を
抜きたいということが露骨に現われ、悲しくなってしまう。（二期生、私立幼稚園教諭）

私立幼稚園に勤めて内からみると、園長自身が園児集めの効果を狙う保育をさせる傾向が強く、派手な結果ばかりを追う
ように思える。その為、短期間で無理な保育を子どもに押しつけている事が多い。現状に即すには経験豊かな質の高い保育
技術が必要であるのに、実際は勤続の条件など厳しく、大変矛盾していると思う。（三期生、元私立幼稚園教諭、主婦）

現在子どもを保育所に通わせているが、細かい部分が見逃されがちで、保母の言葉かけ、態度を改めて欲しいと思っている。
情操教育も日常の生活の中でもできることがあると思うが適切な指導がされていない。（四期生、主婦）

近くに住む同年齢の子と集団で遊ぶ機会のほとんどない、大人の中で育っていく子どもが増えていること、テレビづけになつてゐる子が増えていることを恐ろしく思います。また、就学前教育が宣伝されて、親をあとおり、保育所に通いながらも習字を習つたりと、字を教えこもうと必死になつてゐる親の姿があります。五才児は小学校の予習の年ではないのに、五才の子にとつて大切なことは何かということをおぼわすてゐる人があまりに多い。このことは全ての年齢の子どもたちにいえるのではないのでしょうか。(一四期生、公立保育所保育)

保育所の現場で働いて、子どもとの問題は子ども個人よりその子をとりにまいてゐる家族のあり方や就労条件など社会的な面からの影響が大きいように思う。そのためには保育の中できめの細かい保育内容や配慮が必要なのだが、いくら気持の上で頑張つても限界があり、現場の労働条件も高めていかなければとつくづく感じてゐる。(五期生、公立保育所保育)

非行的な行動に走る中・高校生の生活をふり返る時、幼児期からその問題点があげられるようだ。個々の家庭での生活、仲間関係、社会での位置など見つけた場合、幼児教育のあり方の重要性を感じ胸が痛む。親、教師、大人が子どもへの思い、内面を感じとれなくなつてきたのではないか。めまぐるしく変化する社会に対して保育内容、教育課程が数十年來ほとんど改変されていない現状に疑問があるし、これだけの都道府県、公私のちがいをどう受けとめればいいのか。また幼稚園と小学校の連繋の難しさ、保護者との対応、親の啓蒙の大切さを感じてゐる。(六期生、公立幼稚園教諭)

ここに一部をあげたような記述内容については、おおよそ次のようにまとめることができよう。(1)保育、教育の現場にあつて、保育、教師の目からみた子どもの姿と親のあり方について、(2)子の親として、あるいは保育者として、日々直接にかかわつてゐる幼稚園・保育所の保育内容、保育方針、保育者の資質などについて、(3)親として、保育者

として子どもに対する自らの姿勢について、(4)子どもや保育をとりまく環境としての自然と社会の変化、世間の風潮について、の見解や批判という四つである。

右のそれぞれについて、どの年次の卒業生にもほぼ共通に、いわばキーワード風に使われている語と表現をまとめていくと、次のように集約される。まず現在の子どもの特徴は、知的な面では進んでいるが、性格的、気質的な面で根気・耐性に乏しい、自己中心的で社会性・協調性がない、感受性・自主性が弱い。生活、行動面で、基本的な生活リズムやしつけが身についていない、画一的な室内遊び中心で屋外での素朴な遊びを知らない、習いごとなどで忙しすぎる、などである。一言でいえば、子どもらしいのびやかさがいないということであろうか。総じて、あふれかえる物と情報のなかで、幼時から習いごと、けいこごとに追いつたてられ、仲間とともに自然につつまれて思う存分身体を動かして遊ぶ楽しさ、つまり遊びそのものが奪われた状態、子どもが本来の子どもの世界からいわば放逐されてしまった現状の指摘であるといえる。

他方、親については、かまいすぎ、過保護型と、しつけも教育も他人まかせの放任型、園や子どもに対して細々と口出しをし身勝手な注文をする親と、園に全く依存的な親とが対をなし、子の心によりそうよりは自分自身の生活や都合を優先して子に押しつける、世間の風潮や他人の言動に流される定見のなさ等が指摘されている。これも簡単にいえば、親としての自覚や責任感と自信のなさというところであろうか。子どもの場合も子を介してみる親の場合も、目につくのは消極的、否定的な側面でそれが強調される傾きがあるのは確かであろうが、一つの傾向を示すことは否めないであろう。

さて、このような状況にある子どもと親を受けとめる側の幼稚園・保育所のありようについては、次のようにとら

えられる。私立園を中心に、乳幼児数が激減するなかで一定数の園児を確保するために、競って文字、数字、計算、音楽、絵画、体育、水泳等の指導がとり入れられ、園の特色としてピールされる。人目をひく華々しい行事が次々と企画実行される。送迎バス、給食そして長時間保育がアピールされる。園児の行儀作法や遊びをも細かく規制し管理する過干渉が方針とされる。その一方で、子どもの数に対比して保育者数は不足がちで、病気休職や退職者が出る。保育内容は画一化し、保育者の均質化、サラリーマン化が進んでいる等々。つまり、経営安定の要請と、世間の早期英才教育、知育偏重の波に押されて、小学校のミニチュア版、あるいはその準備機関と化し、子どもにとっての必要性よりも親に受けのいい保育が増えていることの指摘である。

さらに、右にみるような子ども、親、園のありようをもたらしているものとして、高度成長期以降の自然と地域社会の破壊、過剰なまでのマスコミの発達と情報の氾濫、学歴と物質万能的な考え方、人の生命・心情よりも物の生産・利益・効率を重くみる商業主義や行政、政策の進め方等に批判の目が注がれているのである。

以上にみてきたように、家庭の条件も保育現場の状況も年々厳しさを増すなかで、しかしながら、回答者の姿勢には一つの方向性を認めることができる。それは、現状を批判的にみつめながら絶望へと墮すことなく、自らが専門家の視点をもちつつ積極的、建設的に保育の原点に帰るべきとの提言をなすことである。「目先のことにとらわれず人間そのものを大切にする保育を」(三期生、公立保母)、「手しおにかけて、手間ひまかけて育て、人の道、基本的生活習慣、創造力などを心にかけて育児を」(二期生 主婦)、「研究会など多く大変だが、子どもと共に成長しなければ、よりよい保育とは?ということを求めて毎日つとめている」(七期生 公立幼稚園教諭)、「知育や訓練まがいのものでなく、子どもが生き生き活動できるカリキュラムで、命の大切さや人とともに生きていくこと、その大変さや思い

やりの心を最低限学ばせたい」(二期生 主婦) 等々の叙述に、その生きる姿勢が表われている。そして、「大学の経験が基礎となり、そこから生れる幼児教育の深さ広さを自分の手で、子どもと体当りしながら確かめられることはとてもうれしいことであり、一生の生きがいでもある」(五期生、公立幼稚園教諭) 「今、子育てしてみても思いますが、対する愛を深く感じています。……今一番勉強しています。そしてあらためて大学で講義を受けてみたいとも思いますが」(一〇期生、主婦) などに披瀝された生きがい、働きたい、また、人間への愛と信頼、向上心等の基盤に、本学の教育の過程がいささかなりと寄与していることはいいである。同時に、それらの基盤の涵養こそは、本学の教育が今後とも目標としてゆくべき課題であることを、あらためて再確認すべきであろうと思われる。

付記 稿を終えるにあたって一言付記しておかなくてはならない。煩わしい回答を誠実に記入し調査に協力していただいた卒業生の方々に心から御礼を申し上げたいと思う。本文中でも触れたことであるが、大勢の方から、「同窓会があれば出席したい」「お世話になった研究室の先生方の近況を知りたい」「現在の科の様子を知りたい」等々の希望と、「この調査の結果を待つている」旨の要望を、調査票の欄外に記入していただいている。個別にお便りをさしあげたいと思うが、とりあえずは、本稿の報告をもってそれにかえさせていただきたいと思う。

註

- (1) 本文中、同一項目で数値に異同があるのは、記入不備の回答が若干あるためである。
- (2) 次ページ以下に添付の調査票からは、挨拶・依頼及び礼状の部分を割愛してある。

(32) あなたは現在の子どもの生活、保育の現状などについてどんな思いをおもちですか。ご自由におきかせください。

()

(33) あなたご自身のライフ・ヒストリー、プロフィールをさしつかえなければお知らせください。

例

現在

20才	25才	26才	29才	32才	35才	37才
卒業・就職 (幼稚園)	結婚・退職 (幼稚園)	第一子出生	第二子出生	第一子就学	第二子就学 (保育所)就職	義父死亡

年齢 20才

--

事項

4. 公務員 5. 一般企業 6. 個人営業商店等 7. その他

()

- b. 通勤は 1. 自宅通勤 2. 下宿・アパート 3. 寮・社宅 4. その他

()

- c. 就職の契機は 1. 大学の推薦・紹介 2. 親の知人・親戚等縁故 3. 個人でみつ
けた 4. 自由応募 5. その他()

- d. 採用は 1. 正規採用 2. 臨時的採用 3. その他()

- e. 志望の動機は()

- f. 勤続期間は()年()ヶ月

- g. 退職された場合その理由は 1. 結婚 2. 出産 3. 家族の転勤・転宅 4. 病気
5. 老親の介護 6. 進学 7. いやになって 8. その他()

- h. 転職の経験は 1. ある(その内容を具体的に)

2. ない

(27) ㉔で2.アルバイト・パートタイムの仕事をしたと答えられた方におききます。

- a. その仕事の内容は()

- b. 期間は()年()ヶ月

- c. アルバイトを選ばれた理由は()

(28) ㉔で3.就職したことはないと答えられた方は、その理由をおきかせください。

()

(29) 現在就職しておられない方におききます。あなたは今後(再)就職をお考えですか。

1. 就職する気はない → 理由は()

2. できれば就職したい a. 形態は 1. フルタイム 2. パートタイム 3. 臨時
的なアルバイト 4. その他()

3. 是非とも就職したい b. 職種は 1. 幼児保育関係 2. 一般事務 3. なんて
もよい 4. その他()

- c. 時期は 1. 今すぐにも 2. 子どもが就学してから

3. 子どもが小学校卒業頃 4. いつでもよい

5. その他()

(30) あなたが本学幼児教育科に学んでよかったと思われることや後悔しておられることなどがあれば率直にお書きください。

()

(31) 本学ないし後輩に期待しあるいは望まれることがあればお書きください。

()

- (18) あなたの学生時代に教育面で最も不足しており改めて欲しいと思われたことは何ですか。
1. 教授陣
 2. 教育研究のための体制や設備
 3. 開講科目
 4. カリキュラムのうえでのゆとり
 5. 社会的教育活動（公開講座など）
 6. 他大学との交流
 7. 少人数制の推進
 8. 研究会・学会活動の推進
 9. 単位認定や学年試験の改革
 10. 編入・転科制の拡充
 11. 特になし
 12. その他（ ）
- (19) あなたの学生時代に福利厚生面で最も不足しており改めて欲しいと思われたことは何ですか。
1. 食堂・売店・サークルボックス等の施設や設備
 2. 奨学金・貸付金等の拡充や増設
 3. 学費負担の軽減
 4. アルバイト対策の充実
 5. 下宿対策の充実
 6. 保健室や休憩室などの設備
 7. キャンパスの拡大・移転
 8. 就職対策の充実
 9. 特になし
 10. その他（ ）
- (20) 幼児教育科での授業で、卒業後のあなたの生活に影響を及ぼしたのがありますか。
1. ある → それは{ a. 専門科目 b. 宗教系科目 c. 一般教育科目 }
その科目名は（ ）
 2. ない
 3. その他（ ）
- (21) あなたが受講した宗教系科目はどれですか。
1. 仏教学 { a. 概説 b. 入門 c. I d. その他（ ） }
 2. 真宗学 { a. 概説 b. 入門 c. I d. その他（ ） }
 3. 仏教保育 4. その他（ ）
- (22) ⑳について、その科目を受講した感想・印象をおきかせください。
1. とても感銘深く、人生観・保育観のうえで影響をうけた
 2. 真宗・仏教保育を自分のものとして考える契機となった
 3. 内容はおもしろそうだが授業の雰囲気が悪くなかった
 4. わかりにくく退屈あまり意義が感じられなかった
 5. そんな科目は必要ないと思った
 6. その他（具体的に、 ）
- (23) あなたは大学時代の友人と交流しておられますか。
1. 年に何度か会う
 2. 数年に1度会う
 3. 手紙を出しあう
 4. 電話しあう
 5. ほとんど交流がない
 6. 全く関係がない
 7. その他（ ）
- (24) 交流のある友人は次のどれですか。
1. 幼児教育科の友人
 2. 寮や下宿の友人
 3. クラブ・サークル活動を通じての友人
 4. その他（ ）
- (25) 卒業後あなたは就職されましたか。
1. フルタイムの就職をした
 2. アルバイト・パートタイムの仕事をした
 3. 就職したことはない
 4. その他（ ）
- (26) ㉑で1.フルタイムの就職をしたと答えられた方におききます。
- a. 就職先は 1. 公立・私立幼稚園 2. 公立・私立保育所 3. 公立・私立施設

- (7) あなたのご家庭（出身家庭及び既婚の方は結婚後の家庭も）はどれですか。
 〈出身家庭〉 1. 大谷派寺院 2. 他宗派寺院 3. 一般家庭
 〈結婚後の家庭〉 1. 大谷派寺院 2. 他宗派寺院 4. 一般家庭
- (8) あなたが本学幼児教育科に入学された主な理由を2つまで選んでください。
 1. 本学の特徴・学風にひかれた 2. マス・プロ教育でない 3. 学科の教授陣がよい
 4. 高校の先生に勧められた 5. 先輩・友人に勧められた 6. 家族・知人に勧められた
 7. 学費が高くない 8. 通学に便利 9. 学寮がある 10. 就職など将来のことを考えて 11. 学力が適当だった 12. なんとなく 13. その他（ ）
- (9) あなたが1回生次在学中のすまいはどれでしたか。
 1. 自宅 2. 下宿・アパート・親戚宅 3. 学寮 4. その他（ ）
- (10) (9)の生活で最も困ったことは何ですか。具体的にお書きください。
 （ ）
- (11) あなたは在学中にクラブ・サークル等に参加していましたか。
 1. 参加していた 2. 参加していなかった
- (12) (11)についてその理由はなんですか。
 （ ）
- (13) あなたは本学幼児教育科が仏教保育の精神に立脚することをいつ知りましたか。
 1. 入学前から知っていた 2. 入学式やオリエンテーション期間に知った 3. 学生生活を通して知った 4. 研修会などの行事を通して知った 5. その他（ ）
- (14) あなたはそのような仏教保育の精神について、現在どうお考えですか。
 1. 非常に大切なことと思う 2. 大切なことだが私にとってはどうでもよい 3. 別になんとも思わない 4. 無意味だと思う 5. その他（ ）
- (15) あなたは在学中に大学の宗教行事（宗祖誕生会、御命日勤行、大学報恩講等）に参加されましたか。
 1. よく参加した 2. ときどき参加した 3. ほとんど参加しなかった 4. 全く参加しなかった
- (16) (15)についてその理由は何ですか。
 1. とても関心があったので 2. 興味もてる講演・講話があったので 3. 学生として参加するのが当然と思ったので 4. 学寮生だったので半ば強制的に 5. 授業やレポート類に追われて時間がなかつたので 6. クラブ活動などに多忙だったので 7. 友達づきあいや遊びに忙しくて 8. 全く関心がなかつたので 9. その他（ ）
- (17) 学生生活をふりかえって、現在あなたが最も有意義だったと思われることは何ですか。
 1. 大学の宗教行事や講演会 2. 正課の授業 3. 卒業研究 4. 研修会 5. 実習や見学 6. クラブ・サークル活動 7. 大学の友人との交流 8. 寮や下宿での生活 9. 大学外の友人とのつきあい 10. その他（ ）

幼児教育科卒業生実態調査

(1984年度実施)

※ 記入上のご注意：回答は番号を○で囲み、()には自由にご記入下さい。

すべて昭和59年12月末日現在でお答えください。

お名前 () 旧姓 () } おさしつかえない方
現住所 () } のみご記入ください。

- (1) あなたの卒業年次は、()年()月 第()期生
- (2) 現在のお仕事は、
 1. {公立・私立} 幼稚園教諭 2. {公立・私立} 保育所保育 3. {公立・私立} 施設保育〔施設種別名()〕
 4. 会社員 5. 公務員 6. 自営業 7. 無職(主婦、家事手伝いなど)
 8. 学生 9. その他()
- (3) 結婚しておりますか。
 1. 独身 2. 既婚 3. 配偶者と離別 4. 配偶者と死別 5. その他()
- (4) 独身でない方のみお答えください。
 1. 初婚年齢()歳 2. 結婚年数()年
- (5) 現在、ご家族と同居しておりますか。
 1. 同居している 2. 一人住まい 3. その他()
- (6) 同居のご家族についてご記入ください。

あなたとの続柄	性別	年齢	職業又は勤務先、学年等	宗門関係(僧侶、寺族一般等)
1. あなた				
2.				
3.				
4.				
5.				
6.				
7.				
8.				
9.				

